

<h1 style="font-size: 2em;">指導資料</h1> <p style="font-size: 1.2em;">鹿児島県総合教育センター 平成28年4月発行</p>	<h1 style="font-size: 2em;">社会 第128号</h1>	
	対象校種	幼稚園 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校

中学校社会科歴史的分野における郷土教育の充実

「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養い、これからの社会づくりに貢献できる人間」の育成に寄与するために、中学校社会科歴史的分野において郷土教育の充実を図る取組を紹介する。

1 郷土教育の目標と社会科との関係から

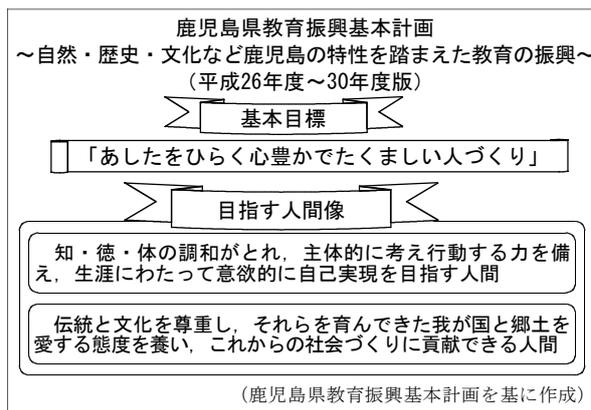
鹿児島県教育振興基本計画（資料1）では、本県の教育目標を「あしたをひらく心豊かでたくましい人づくり」とし、目指す人間像として次の2点を挙げている。

第1の「知・徳・体の調和がとれ、主体的に考え行動する力を備え、生涯にわたって意欲的に自己実現を目指す人間」は、いわゆる「生きる力」を育むための、学校教育における全ての取組と関係が深い。

第2の「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養い、これからの社会づくりに貢献できる人間」は、本県の郷土教育の目標である。

本計画の理念によれば、郷土教育は教育全般において推進されるべきであるが、学習指導要領（資料2）に見るように、特に社会・地理歴史科は、郷土教育に直接的に寄与することができる教科であると思われる。

資料1 鹿児島県教育振興基本計画



資料2 学習指導要領に見る郷土教育の視点

- 【小学校社会科第3学年及び第4学年の目標】
- (2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。
(「中学校学習指導要領」p.177から引用)
- 【中学校社会科の歴史的分野の目標】
- (4) 身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に関する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。
(「中学校学習指導要領」p.36から引用)
- 【高等学校地理歴史科 日本史B 内容の取扱い】
- (1)のウ 年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること。
- (1)のオ 地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てるようにすること。
(「高等学校学習指導要領」p.42から転載)

2 本県の先人の偉業や歴史の特徴から

平成27年(2015)7月5日、鹿児島市吉野町磯の旧集成館、旧鹿児島紡績所技師館(異人館)等の一連の産業施設が、「明治日本の産業革命遺産」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。これを機に幕末から明治期に郷土の先人が果たした役割の大きさを再認識する機運が高まっている。

また、平成30年(2018)には明治維新150周年を迎えることから、維新の中心的役割を担った本県の歴史や先人の遺業について、改めて強く認識されることが期待される。

このようなことから、近代史において郷土鹿児島がどのような役割を果たし、それにどのような意義があり、どのように現在につながっているのかということなどについて考えさせる授業を展開することで、郷土教育の充実を図る必要があると考える。

なお、本県には、近代に至るまでに、その地理的な条件が育んだ独自の歴史や文化がある。したがって、近現代史だけでなく、歴史的分野全体で郷土教育に取り組むことが重要であると考え。地理的な条件とは、例えば、鹿児島が日本列島の西南端にあり、中央から隔絶していることによって閉鎖的・後進的でありながらも、古くから世界の国や地域の文化と接することができる位置にあったことにより開明的・先進的であるという二面性をもつことなどを意味する。

こういった条件が育んだ鹿児島独自の歴史や文化は、本県の児童生徒に学ばせておきたい事柄であり、中学校社会科においても積極的に取り組ませたい。

3 歴史的分野における郷土教育の計画例

郷土教育の重要性・必要性は理解できるものの、実際の授業においては、学習指導要領に示された本来その時間に行うべき学習の目標や内容があり、また、時間の制約もあるため、これを十分に推進できない現状もあると思われる。

そこで、歴史的分野の授業において鹿児島島に關係する資料を積極的に用いることで、郷土に対する認識を深めさせることを次の(1)・(2)の例を基に提案する。

(1) 郷土資料を活用した授業計画例①

資料3は「しよく にほん ぎ続日本紀」に記されている大隅国設置おおすみのくにの記述である。

資料3 「続日本紀」に記されている大隅国設置

※ 乙未 和銅六年四月は三日	※ 和銅六年 西暦七一三年	置した。	日向国から肝坏・贈於・大隅・始羅の四郡を割いて、始めて大隅国を設置した。	(和銅六年)夏四月乙未。(中略) 日向国から肝坏・贈於・大隅・始羅の四郡を割いて、始めて大隅国を設置した。	(和銅六年)夏四月乙未。(中略) 割日向国肝坏贈於大隅始羅四郡、始置大隅国。 (続日本紀卷六、国史大系所収)
----------------	---------------	------	--------------------------------------	--	--

「続日本紀」は、文武天皇(在位697~707)から桓武天皇(在位781~806)までを対象とする史書(六国史)である。この中に見える大隅国設置の記述は、中央政権(大和政権)が南九州の統治体制を強化したことを如実に示す史料である。この前後、南九州の隼人族は数度に渡って反乱を繰り返していたが、大和政権に鎮圧され、奈良時代になってから他の地域からは遅れて、正式に天皇の支配下に入ったのである。

出していた時期に当たる。重豪が薩摩藩の近世初頭以来の閉鎖政策を大転換したことにより、鎖国の中の鎖国を行っていた薩摩藩に、領外の人が比較的容易に入ることが可能となった。他領の人々から見れば未知の世界が開かれたということになり、薩摩藩内の様子に驚くことが多かった。天明2年（1782）頃、鹿児島を訪れた南谿は、当時建設されていた造士館ぞうしかんや明時館で行われていた鹿児島の教育・文化・研究レベルの高さに驚き、資料5のように記したのである。これを踏まえ、授業を資料7のように計画する。

これは課題を特設し、郷土の史料を中心に展開する授業例である。

資料7 「西遊記」を活用した授業例

課題解決のための学習活動	
課題設定	学習課題の設定による学習への関心・意欲の喚起 「江戸時代に鹿児島を訪れた橘南谿は、明時館の様子をどのように捉え、どう評価していたか。」
	「知識」の習得 ○ 近世前期・中期の薩摩藩は「鎖国の中の鎖国」の状況にあったことへの理解 ○ 18世紀の薩摩藩では第8代藩主島津重豪による開化政策が行われていたことへの理解 ○ 重豪が建設した造士館や明時館では蘭学が学ばれていたことへの理解 ○ 薩摩藩は琉球などを通じて海外情勢を把握しており、西洋の文化や技術が優れていることを認識していたことへの理解 など
課題追究	「資料活用の技能」の習得
	○ 「西遊記」の一節を用いた情報の読み取りとその解釈 ・ 「露台」、「数丈」、「日輪」、「量大鏡」、「ソングラス」、「推歩」、「実歩」、「板行」、「暦と七曜暦の違い」とは何かということの読み取り・解釈 ・ 暦を作成していたことの読み取りと、その意義の解釈 ・ 橘南谿が明時館をどう評価していたかということについての読み取りと、その意味の解釈 など
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ○ 橘南谿は、あまりよく知られていなかった薩摩のことを知り、驚いたのではないかという推察 ○ 橘南谿は、それほど進んでいないと考えていた薩摩藩の明時館の観測・研究レベルの高さを知り、高く評価したのではないかという考察 など
課題解決	予想される生徒の「表現（課題解決）」例 「薩摩藩が建設した明時館では、西洋の文化や技術を取り入れて高度な観測・研究を行っていた。橘南谿は、そのことを非常に高く評価していた。」

※ 課題を設定し追究する学習の展開については、当センター指導資料 社会第121, 124, 126号を参照

4 教師による郷土史研究の奨め

ここまで、郷土教育の視点を社会科歴史的分野の授業に取り入れることの重要性について述べ、鹿児島の閉鎖性・後進性を示す史料と、鹿児島の開明性・先進性を示す二つの史料を基に計画した授業例を紹介してきた。このように、郷土教育を進めるためには、教師自身が郷土がどのように歴史を刻んできたのかについての研究を深め、資料収集に努める必要があると思われる。

しかし、このような郷土史料は、教科書や資料集等には十分に掲載されてはおらず、収集が難しい。また、研究のための時間確保も困難であることが多い。

そこで、当センターでは、郷土教育講座（短期研修）資料として作成した「鹿児島県の歴史概観」（資料8）を、Webページ上にアップロードしているため、これを活用したい。

特に、中学校社会科歴史的分野の授業において、この資料を積極的に活用し、郷土教育の充実を図っていただければ幸いです。

資料8 「鹿児島県の歴史概観」



—引用・参考文献—

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』平成20年、日本文教出版
- 児玉幸多編『史料による日本の歩み 古代編』1960年、吉川弘文館
- 橘南谿著 宗政五十緒 校注『東西遊記2（西遊記）』昭和49年、平凡社

（教科教育研修課）